

田中 直毅・佐藤 整尚 著

『経済予測と因果解析』

日本評論社、2024年11月刊、四六判、384ページ、3,100円+税

年末になると来年の景気動向の見通し、経済予測の記事がメディアで報じられることがある。現下の経済情勢、将来の経済情勢を説明するのは政府および民間エコノミストの仕事であり、そうした情勢判断に基づき経済政策は構想される。しかし評者を含めて本誌の読者はエコノミストが出してくる数値に対してどの程度信頼性があるのか、疑問が生じることも少なくない。本書は長年、経済予測に携わっているエコノミストの重鎮からの少し変わったメッセージである。AIC（赤池情報量規準）と言えば日本だけでなく世界の統計学者の間でも知らない人は少ないと思われるが、本書はAICを提唱した故赤池弘次氏（元統計数理研究所所長）の薫陶を受けたエコノミストによる経済予測の実例と経験について解説した啓蒙書である。

まずは本書の概略を紹介しておこう。序章ではエコノミストに対する疑問、それに対する回答を通した想定問答集である。第1章「中国経済を映しとるCIPPS中国指数作成の試み」という中国のマクロデータを巡る課題と経済動向の把握の試み、第2章「P&Gとユニリーバに見るグローバルエコノミーの変容」では2つのグローバル企業の動向分析の事例報告、第3章「マネタリーベースを持続拡大させよ」ではマクロ経済動向の統計的方法についての事例、第4章「金融市場で問われる政府の規律付け」では経済政策を巡る統計的分析、第5章「赤池弘次先生の挑戦」では赤池氏による統計的時系列法の開発の経緯やなぜ経済データ分析で重要なのかの

説明、第6章「グローバルエコノミーとAICによる検証命題づくり」ではこの間の日米中の経済動向の分析、第7章「予測モデルで構造変容に迫るAIC」では予測モデルによる今後のマクロ経済の動向分析、付録「多変量自己回帰モデルを用いた逐次予測の方法」では多変量時系列分析についての短い説明、から構成されている。

いくつか気の付いたコメントを述べておこう。第1に本書は赤池氏による統計的時系列分析法による経済分析の有用性についての啓蒙書である。著者たちの努力にもかかわらず、時系列分析の有用性についてあまり議論されていない論点がある。特に1980年頃に日本銀行金融研究所で行われた議論は今でも重要な論点を提起していると思われる。またマクスウエル、ハイゼルブルグ、ウイナー、赤池各氏が登場、物理学の不確定性原理になぞらえ、経済データと経済予測の困難性という議論は興味深い。経済予測の問題を解決する手段として著者たちは「AICに基づく逐次予測法」を開発したようである。マクロ経済予測はかなり古くから行われているが、物理などの自然科学と異なりなぜ予測の精度が十分上がらないか、という考察は重要である。（余談ではあるが）しばらく前にある物理学者に住宅ローンのことを聞かれたので「これほど低金利なことは歴史上なかった」とのコメントに対して「それでは固定金利ローンの方が良いのですか？」と言われて返答に困ったことがあった。「金利が上がるのが事前に分かっているならば一儲けできる」のが現代の経済社会である。

こうした論点を深掘するきっかけになりうるとのコメントは書評の役割から少し逸脱しているかもしれない。

第2には中国のマクロデータと経済動向を巡る議論に一石を投じていることが挙げられる。中国では統計法の順守が不十分なこともあり、経済動向の理解と政治情勢が区別されにくい状況が続いているようであるが、中国の経済動向の把握に一石を投じているように感じられる。世界における中国経済の比重は飛躍的に増大したが、マクロ経済の実態をデータから把握することはかなり困難である。著者たちはCIPPS中国指数と言う一種の景気動向指数を開発、利用していることは公的統計にとかく問題があることを含めて興味深い試みと言えよう。

第3には評者はエコノミストとしての本書における経済動向の見方の説明は十分に理解しているとは言いがたいが、エコノミストを始め、経済学者の議論の多くは後知恵の披露の感がある、とは言い過ぎだろうか。例えば日本のバブル崩壊の前と後で同じエコノミストや経済学者の発言を調べてみると面白いだろう。毎日メディアで報道されている株価や円・ドル為替レートなど金融価格の変動の説明はどうだろうか？ ちなみに「A Random Walk Down Wall Street」という書籍は1972年より12版を重ね、いまだに米国のビジネス関係者の間でよく読まれていることは評者にとっては興味深い。

ここでやや細かな技術的コメントを2つ挙げておく。本文39ページと付録で説明している統計モデリングの説明に若干の齟齬があると評者には感じられた。経済データにおけるトレンドの処理は重要な問題であるから、著者たちが利用している統計的時系列モデルを正確に説明する必要があるのではないだろうか。第2には実際に観察される多くの経済時系列には季節変動

や不規則変動があるので日本の公的統計ではセンサス局X-12-ARIMAプログラムに基づく季節調整系列が広く利用されているがそれでよいのか、本書ではほとんど言及がないのが残念であった。啓蒙書とはいえもう少し時系列分析の初歩的な議論があると良かったとは統計家からの一言、次の機会を期待したい。

現在・将来のマクロ経済動向や経済予測を理解することは日々の懐具合を気にする読者にはアートの世界のようなものである。しかし2025年春にはコメの市場価格の動向と備蓄米の放出効果の議論が盛んに行われているように、多くの庶民も物価や賃金など経済の先行きには無関心ではないだろう。しかし制度を所与とすると、例えば減税すれば税金は減少、どうやって財政・年金制度をまかなって運営していくのかなどを検討するには政策シミュレーション、経済予測は不可欠である。その際、科学的に経済予測を行うにはどうしたらよいか？ これは古くから様々な議論があるがデータサイエンスが興隆する中でなおより説得的な統計的方法の開発が求められる。

結論としては、この書籍で議論している経済予測の問題は単なる経済統計上の技術的問題にとどまらず、日本経済の動向やこの間の経済政策を巡る議論において重要な役割を担っている。日本の現在や将来の景気動向に関心のある多くの読者、また大学時代に経済学を学んでいたとしても、経済学の教科書には本書で論じているような経済予測をめぐる様々な論点を学ぶ機会にはなかった読者にとり、2025年の時点において現在と将来の日本経済の経済動向と統計的方法を考える上での材料として本書の一読を推奨する。

評者：国友 直人・くにとも なおと
(統計数理研究所特任教授、東京大学名誉教授)